

**KISS ICK**

*- color -*

shiroa

## 序

---

見渡す限り、色彩豊かな世界。

目に見えるからといって、そこにあるものは正しいとは限らない。  
錯覚や思い込みによって、同じ景色をみても、十人十色の解釈があるだろう。  
”この解釈が正しい”、という絶対の解釈はありえない。

でも、時に人はこの”正しさ”を人におしつける。

しかし、正しくないといけいのだろうか？  
誤りには意味がないのだろうか？

真実にどれほどの価値があるのか？

詭弁も聞こえてきそうな問いだが、どれだけの人がそこで悩み苦しんでいるだろうか。

正しくないといけない。

その呪いのような言葉に囚われ、どれだけ自分の自由な心を縛りつけてきただろう。

Set's me free. 心を解き放て。

今宵の旅は常識をという壁に風穴をあける、白き鴉の軌跡である。  
時に痛く苦しい道のりを超え、やがて迎える夜明けとは？

それでは、しばしの旅を。

# 黒

---

光がとどかない場所を闇という。  
私は子供の頃、親の愛情が届かないコだった。

父親も、母親も、それなりに愛してくれていたと思う。  
けれども、受け取る私にそれが認識できていなかった。

烏はどうして黒いのだろう？  
猫はいろんな色の猫がいるのに。  
烏といえば、黒だ。

烏＝黒、という認識。

そんなのあたりまえ、常識じゃないか。そんな言葉が頭の中をこだまする。  
そして、“常識”という言葉は大人になった今でも、時折私を苦しめる。

“常識”ってなんなんだろう？

孤独だった。  
なんで私は生きているんだろう？ と考えるコだった。

もしかしたら自分が見ている場所しか世界は存在しなくて、  
それ以外の場所は闇なんじゃないか。そう考えることもあった。

私、という存在を演じさせるために、演出された狭い世界がそこに展開されていて、  
その角を曲がれば、実はそこは何も存在しない闇の世界。

そんな考えにとらわれたコ。  
現実も、夢も。混交した世界の住人。

それが子供の頃の“私”。

”体”ってすごくわかりやすい。

具体的。だって視覚的で、感覚的だもの。

でも”心”って曖昧。

抽象的。見えないし、他人の心を真に感じることはできないもの。

ある程度、”心”を読むことは可能かもしれないけれど。

人の”心”を100%読むことはできない。

究極、自分の”心”すら理解することは怪しい。

だから、気がついた時には”心”は傷だらけになってる。

自分のしらないうちに、あざだらけになってる。

もし自分の心を見ることができたら、

子供の頃の私の”心”は紫色のあざだらけだったろう。

言葉をしゃべれば、意味がわからないと言われる。

だから、しゃべらなかつた。

何かをすれば、動作が遅いとか言われて怒られる。

だから、何もしなかつた。

だから、今でも喋ることが苦手だし、人一倍不器用なんだ。

しゃべるのが苦手だったら、しゃべる練習をすればいいんじゃないのかなあ。

何かをするのに鈍くさいのなら、うまくできるまで訓練すればいいだけじゃないの？

いったことをすぐに身につけることができる優秀な子供しか、大人は欲しくないのかも知れない

。

私は淘汰されるべきコだったのかも知れない。

仕事をはじめたとき、何が気に入らないのか、随分嫌味を言われた。  
ことあるごとに嫌味な言葉を浴びせ掛けられ、  
なぜ一緒に仕事をする仲間なのに、こんなこと言われたいといけないのだろうと思った。

会社の先輩たちは、子供の頃私のそばにいた大人たちと同じ。  
優秀な人しか欲しくない。  
じゃ、淘汰されて、辞めていくべきなの？

私は歯をくいしばった。  
辞めてしまえば、簡単なこと。解放されるよ。  
けど、次の場所でも同じことがあるかも知れない。  
そしたら、また同じように辞めるの？

逃げ続けていて、いつ、前進できるの？

前進なんてできる気がしない、今までの経験から考えれば。  
じゃ、なんとか立ち向かってみよう。

私に”残忍”な心が目覚めた。

先輩たちは、敵だ。敵は専門知識を有している。  
専門知識を先輩以上に身につければ、先輩たちに勝てるかもしれない。

私は戦うことにした。

仕事が終わりに、疲れ果てた体で夕食を作り、すませた後、専門書を紐解き勉強した。  
すると面白いことが起き始めた。  
先輩たちの身につけていた専門知識、嘘ばかりだ。

笑いが止まらなかった。

嘘、嘘、嘘。嘘ばかりなのに、なんで私は嫌味を言われてたの？  
こんな嘘で武装した知識で仕事をしている奴らに。

藍より青し。反骨ののろし。

異性は私を遠ざける。  
私が歩み寄ろうとしても、同極の磁石のように離れていく。

時々歩み寄ってくれる人もいるけれど、冷たい。

もらった電話番号は、鳴らしてもつながらない。  
会う約束をしても、ドタキャンされる。

そんな事ばかり続いていたから、私は異性とは冷酷なものだと思っていた。  
そして、それが当たり前だとさえ思った。  
期待しては、裏切られる。

いつしか、裏切られるのが嫌で、期待もしなくなった。

きっと、原因は自分にあるのだろう。  
私は子供の頃、自分は知恵遅れかも知れないと思っていた。  
健全であると判断されていたけれど、障害者に限りなく近いのではないかと。  
いっそ、障害者の世界で生活していれば、もっと楽に生きることができたかも知れない。  
そんなことをいうと、障害をもつ方々には失礼だろうけれども。

”普通”と呼ばれる人たちは、私とは共存できないかもしれない。  
”普通”と呼ばれる人たちは、私に異常な空気を感じ、遠ざかるのかも知れない。  
”普通”になれば、私は普通に恋愛をして、仕事をして、幸せに生きていけるのだろうか。

けど、”普通”にはなれない。”普通”がどういうことなのか、分からないから。

コモンセンス、共通の認識というものが”普通”なのかも知れない。  
でもそれをどう身につければいい？

鏡をのぞく。そこには、蒼褪めた自分の顔が不気味に映っていた。

## 緑

---

緑色の血の話をしてしよう。

SF映画でよくある設定だ。宇宙人の血の色は緑色。

これは荒唐無稽な空想なのだろうか。

それとも、根拠ある空想なのだろうか。

私たちの血が赤いのは鉄分を含んでいるからである。

血中の鉄分が酸素と結合すると、鮮やかな赤色を発する。

動脈血だ。

対する酸素を細胞に供給し終えた血、静脈血は暗い臙脂色をしている。

血液の中にある赤血球。

これには骨格を成すポルフィリン核という化合物があり、その中心となる金属が鉄である。

イカの血は青いという。薄い空色をした血が流れるイカの血には銅が含まれる。

鉄は赤い色を生み出し、銅は青い色を生み出している。

そして共に酸素と密接な関係にある。

植物もまたポルフィリン核をもっている。

中心となる金属はマグネシウム。それは緑色をしている。

葉緑素だ。

これも酸素と密接な関係にある。

宇宙人が植物と同じ性質をもっているとか、

葉緑素では肉食動物のような瞬発的で活力ある行動ができないとか。

そういうことを考えると、緑色の血では動物は活動できない。

宇宙人が緑色の血をもっているというのは、空想上でしかなさそうだ。

が、科学的根拠がないとも云えないと私は思う。

野菜を食べる私たちは、葉緑素を取り込んでいる。

分解されるポルフィリン核はマグネシウムが取り除かれ、鉄が組み込まれるかのように、

体内の骨という化学工場では新しい血液を製造し続けている。

私たちは緑色の血を食している、吸血鬼。

これはひとつの解釈と云えるかもしれない。

見えないものというのは、どうも信じられない。

”気”という存在があるという。

厳しい修行を行い、気を高めることができると、自分も見えるようになるという。

戦後日本に多大な影響を与えた中村天風というヨガ行者は云った。

「あなたがたが、いかに真面目ぶっても、本当に真面目に修業をしているかはすぐに分かる。

きちんと修業を行っていない人は、汚いオーラ（気）が出ているから」

そう云って天風は笑った。

『聖なる予言』という本の中でも”気”について書かれている。

こちらは実に具体的だ。

気が高まる場所で、どのように修行すれば、

どんな感じで気を練ることができるようになり、他人の気がどういう風に見えるのか。

話し合いの際、相手をいい負かそうとすると、相手の気を吸い取るとか。

また、その様子が見えるとか。

そこには実に興味深い話が書かれていた。

ただ、『聖なる予言』は小説である。小さな説話、たとえ話。

信憑性は藪の中。

見えないからといって、そこにはないとは限らない。

空気は見えないし、電波も見ることにはできない。

温度も見えないし、磁気も見えない。

盲目であれば、世界は視覚的にとらえることができない。

でも、世界は確かに存在している。

ヨーロッパでは”エーテル”という物質があったと信じられていた。

エーテルは空気中に存在しており、光や力が伝わる媒質として認識されていた。

不思議なことが起こる原因と思われていた、というのが分かりやすいかもしれない。

具体的には”魔法”である。

何もないところから火を出す。電気が起きる。

幽霊の類も含まれていたかもしれない。

19世紀まで長らく信じられていたこの概念は、今では完全に”否定”されている。

科学の進歩により、魔法は、消えた。

やがて真っ暗な夜がやってくる。

月が出ない夜は、いつもと同じ景色なのに不気味だ。

闇に恐怖を感じるのは、不確かであるからだ。

例え闇であっても、そこに何があるのかが分かれば、決して恐くはない。

私はずっと孤独だと思っていた。

理解してもらえない人はいないと思っていた。

喋るのが苦手な分、心で考えることが多いコだったかも知れない。

決してたくさん本を読んだわけではなかったけれど、

なぜか作文だけはうまかった。

インターネットの普及で、自分の文章を読んでもらえる機会が増え、

同じような悩みを持つ人がいることも分かった。

自分だけじゃない。

そう思えることが、どれだけ心強かったか。

”常識”への抗い、これは、戦いだ。

”文学”という武器を振るい、”常識”という強大な敵と戦う。

だからか。私が小説を書く時、文章を書く時、ロックを感じる。

攻撃的で、破壊的なパワーをぶつけるという点では類似している。

いままでは孤独に闘っているけれど、確実に同志はいる。

また、悩んでいる人がいる。

このオレンジ色の夕日が沈み、真っ暗な夜がやってくるが、それがおしまいではない。

やがて曙光は大地を照らすだろう。

朽ち果てているのは、私かも知れないが。

戦わずに朽ちるよりは、まし。

”常識”という強大な敵に対し、私は”文学”というか細い武器で夜襲をかける。

祖母は私に『昭和大百科事典』という昭和初期の分厚い冊子を私にくれた。

旧字体でびっしりと書かれた本には、過去の歴史から科学的なこと、社会的なものや世の中の常識まで書きこまれていた。

祖母が亡くなったある日、母はこんな話をしてくれた。

「おばあちゃん、火星には宇宙人がいるってずっと信じていたのよ」  
バカな。

宇宙人がいない、とは簡単には否定できないが、せめて太陽系規模ぐらいなら宇宙人が存在しないことは分かりきっている。

生物が住める環境では無いのだから。

火星人が存在する。あの、たこみみたいな人たちですか。

そんなバカげた空想、SFの世界だけで十分だ。

そう思っていた。

数年後、たまたま『昭和大百科事典』を紐解き、天体についての項目を読んでいた。

旧字体は一瞬難しそうに感じるが、だいたいの漢字は字面と前後の内容でほぼ理解できる。

決して読んでみると難しいものではない。

火星についての項目で、こんなことが書いてあった。

『火星には火星人が住んでいる。\*\*がその証拠であり、それは火星人の生活行動により起きているのだ』

この\*\*の部分は忘れた。そんなことはどうでもいいのだ。

私が驚愕したのは、昭和初期に火星人が存在することが”常識”だったということだ。

”エーテル”は完全否定されるまでは、”常識”だった。

”常識”とは結局、不確かなもの。

けど人はいうのだ。”常識”を持って、と。

火星人が存在する、そんな”常識”を抱いて亡くなった祖母は、可哀想なのだろうか。

たったひとつのこの知識だけで、幸か不幸かは測れないだろう。

損だとか、得だとか。そういうのは別次元の話だ。

私が問いたいのは、誤った常識を抱いて生きることが、いけないのかどうか？  
その答えを是非学識のある方へ問いたい。

―一月のない夜、火星は赫く輝いていた。

自然、衰弱し、消耗し、死に向かう魂だった。  
みずから命が絶てるのなら、どれだけ楽だろうと思っていた。  
人生は残酷で、冷酷。私の存在は誰も求めてなどいない。

一日一日が苦痛だった。耐えがたい苦痛だった。

大人はみんなこの苦痛を耐えてきたのだろうか。今も耐えているのだろうか。  
もしこんな辛い人生を笑って生きていける強さを持っているのなら、  
どんなクズに見えても、その大人を私は尊敬するかも知れない。

ある本と出会った。

その本ではありえないことが起こることの比喩に、”そないなことが、ほんまやったら、白い鳥が  
飛びますわ”というようなセリフがたびたび書かれていた。  
”白い鳥”というのは、”非常識”という例えで使われるらしい。  
この情報が本当か、嘘かはどうでも良かった。

死ぬことは逃げることだと思った。  
死ぬことは敗北することだと思った。

どうせ死ぬなら、真っ向から”常識”と対峙し、戦ってやろうと思った。  
自らではなく、勇敢な死を。

高校生の私は”文学”という武器と出会った。  
人によってはその武器は”音楽”かも知れないし、”イラスト”かも知れない。  
私は”音楽”や”イラスト”という武器はまったく使いこなすことができなかったが、  
”文学”は不思議と手になじんだ。

そして苦痛を耐え忍ぶ毎日から孵化し、一羽の鳥となった。

——白鴉（shiroa）はこうして生まれたのだ。

## 結

---

すべての光の波長を重ねると、白になる。  
虹色は大気により分光されたプリズムだ。  
還元すればそれは白い光のアーチとなる。  
さらにそのアーチを俯瞰して全景を観ることができれば、  
真円の光輪になるだろう。

その光輪を原点に還すと、そこは一点の光源に行きつくはずだ。

純粋な目で世の中をみる。  
誰かの考えは参考にはするが、鵜呑みにはしない。  
自分の中の、確たる信念を持って、私は戦う。

戦うことが、生きることだから。

螺旋の階段は幾重にも重なり、足を踏み外すと簡単に別次元へ移行する。  
終わりの見えない、暗い世界で。

希望となりうるか、それすらわからないのに。

.....現実と虚実を織り交ぜながら、物語は紡がれていく。